学校便り　２月号　（７・２・１）

ツバキ

（画）福田麻紀

木偏に春を書いてツバキと読みます。

日本書紀の昔には「海石榴」を当てているとのことで、いつか「椿」と書くようになったことに、この花への期待や季節感が表れていると思います。

アンコ椿は恋の花、と情熱的でもあります。

学校のツバキは、通用門脇のヤブツバキ。

ツバキは園芸品種として１００種を越えるようですが、ヤブツバキはそれらの原種となったものです。

濃い赤色の五弁の花びらは筒形の半開、中に足の長い雄しべがまた筒形に集まっています。

花の散り方から、首が落ちると忌み嫌われた時代もあります。

それでも、本来暖林帯のこの花が、東北や北陸の積雪地帯にまで広がったのは、その強い性質もさることながら、やはり私たちの美意識に強く訴える美しさあるからでしょう。

ところでサザンカは。

本校でも垣根風に群植したサザンカがたくさん見られますが、サザンカもツバキ科。仲間同士です。

花の散り方で区別できます。ぽとりと散るか、はらはら散るか。

サルスベリ（百日紅）

花の咲いている期間が長いので、百日紅と書いています。

もっとも淡紅色だけでなく白色、淡紫色の花をつける木も見られますが。

花びらにちりめんじわがかかっていますから、花の塊が大きく膨らんで、夏の青空によく映えて輝きます。

正門脇に１本、歩道の上の斜面に２本。

つるんと滑らかな樹肌なので猿も滑るということでしょう。

明るい赤褐色の幹はすぐそれとわかるユニークな樹木です。

カエデ

冬の気配の中で、山は紅葉に染まって行きます。

「紅葉」を「モミジ」とも読みますが、モミジは紅葉するものの総称です。

「カエデ」を「モミジ」と呼ぶこともありますが、それはカエデの紅葉が最も色鮮やかだからでしょう。

サクラが春を代表するなら、紅葉は秋を代表するものです。

サクラの後には次々と色々な花が咲きますが、紅葉の後は枯れ野となります。

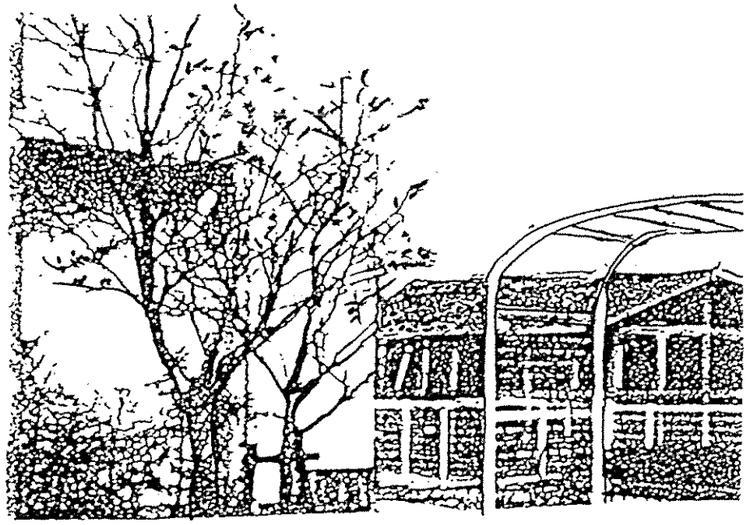
そのせいか、私たちの心には、一層色鮮やかな、それでいて静かな印象が刻まれるように思います。

日本全土にその土地に合った種類のカエデが生育しています。植物の世界で、気候風土に合わせて様々な種類があるということは、たいへん珍しい現象なのだそうです。

学校には２種類。

職員玄関の横に「新出猩々」という芽立ちから赤いカエデが１本。

飼育舎の付近と理科室脇に、山の中でも一般的にみられる「イロハカエデ」が合わせて４本あります。

「モミジのような手」はかわいらしい赤ちゃんの手、落ち葉の造形遊びの代表格です。

文庫本のしおり代わりにカエデの葉を挟んだ記憶、あなたにもおありでしょうね。